ソーシャルワーク技能の向上を目指した演習教育に関する検証
－テキストマイニングによって探る技能向上の要因－

島根大学　　黒田　文（002095）

キーワード：演習教育，グループファシリテーション，テキスト・マイニング

1．研究目的

本研究の目的は，社会福祉養成課程においてソーシャルワーク技能の習得を目指して実施される相談援助演習（旧社会福祉援助技術演習．以下，演習とする）の教育内容に関する有効性について検証を行うことである．社会福祉士の養成教育にかかわる近年の趨勢をみると，2002年に演習科目に要する時間が60時間から120時間へ変更となり演習の比重が高まるほか,2007年の改正では時間の増加にとどまらず，演習担当教員の資格要件を設定することで教育指導者の質の確保がはかられるなど演習教育に関する模索が行われている．

中村（2010）によれば，演習教育に関する先行研究では，教育研究者・研修実施者側の考え方を中心として目的や期待が述べられるにとどまっているため，今後の演習教育システムに必要となるのは，研修実施者側と受講生側の相互作用で生じている問題について検証し，その解決課題を明らかにすることだと考えられる．そこで本研究では，報告者の勤務校にてソーシャルワーク技能の習得を目指した演習を受講した学生が，演習内容のどのような点に効果や有効性を見出しているかに関する検証を試みる．中村（2010）が指摘する「実施者側と受講生側の相互作用で生じている問題の検証」までは行き着かないものの，受講生が認知している演習の教育効果を把握することで学習者の現状を理解し，演習内容を検討していく第一歩としたい．

2．研究の視点および方法

演習の効果や有効性について検討する手法としては，1）受講生が演習のワークシートやふりかえり用紙に記述した内容についてカテゴリー分類により定性的に検討する，2）受講生に対し，構成型のアンケート調査を実施して効果や有効性について定量的に検討する，の2タイプがある．その分類に従えば，本研究は受講生が記述したレポート内容をテキスト型データとして分析する2)の定性型手法と位置づけられる．しかし，従来の方法と本研究が異なるのは，テキストマイニング技法を用いて質的な解析を行っている点である．この技法を利用する理由については次のことが挙げられる．従来の定性型手法では，文書を「読む」という作業を中心として，研究者の経験や主観により分類や解釈を行うため，研究者の力量や関心によって得られるものが異なる可能性がある．それに対し，テキストマイニングの場合は，対象となるテキスト型データを誰が扱っても極力おなじような結果が見出されるような方法で分析ができるからである（石田, 2008）．そのため，本研究では，研究者の主観をなるべく混在させない，ならびに，再現性の保証という観点からテキストマイニングを用いる．とはいえ，それは決してこの技法が従来のやり方に比べ優位であることを主張するものではない．報告者が本技法を用いるのは，主観の混在を狭めた手法から得られた結果が従来の手法により得られた結果と適合するのであれば，それは検証という意味

で価値があると考えるためである．なお，有効性の検証については，チェックリストを活用し，統計的にt検定を行った．

3. 倫 理 的 配 慮

受講生のレポート内容が研究対象となることについては，記述者が特定されないデータ手続き（文書が分割され必要に応じて語彙が置換される）によって公表されることを説明し，了承を得ている．

4. 研 究 結 果

プレとポストに回答した得点の変化について，対応のあるt検定を行った結果，表1に示すように得点の向上が有意であることが確認できた（有意水準α=0.05）．結果からは受講生が技能を実践できるという有能感を高めていると推察される．テキストマイニングの結果については，発表当日にレイアウトグラフを用いてカテゴリ間の関係構造を図示する．特に，演習において何が「有効」であったかという点について検討するため，当日は「有効」というカテゴリー項目に対して重複度が高いカテゴリー群に注目して結果を説明する．

表1　プレ・ポストの得点に関する検定結果

	対応サンプルの差			t値	自由度	有意確率（両側）
	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差			
ペアpre - post	3.10	3.96	1.25	2.47	9	.035

5. 考 察

受講生は，演習おいて自分が「技能」を試す「実践」が「できて」，その実践に関して「他学生」から「フィードバック」を受けたことが有効だと認識していることが明らかとなった．演習という空間では，現実に自分がとった行動について時間をおかずに具体的なフィードバックを受けられるため，その内容や意味が現実味を帯びて受講生に浸透すると考えられる．フィードバックの有効性についてはGreen-渡部 (1995) の指摘と合致するが，彼女が3種類の方法を組み合わせて受講生がフィードバックを得る回数の増加をはかっているのに対し，本演習では，状況を変えて受講生が繰り返しファシリテーター役をこなしフィードバックを得る回数を増やしたことが功を奏したと考える．大沢 (2001)や川島 (2003) の研究成果では，グループ演習の有効面として「気づきが多かった」，「幅広い考え方ができるようになった」，「自分の考え方が深まった」，「様々な人の心に鋭くなった」など，やや抽象的なコメントが多いのに対し，本研究では「一つ一つの意見をその後の流れにつなげ，そこから解決に向かわせるような進め方ができなかったことに気付いた」，「一歩先にグループに生じている問題を考え，どうすればこの先の話し合いが上手く進むかという解決方法を考える必要性があると気付いた」など，自分がやるべきことや対応策についての言及が多く，受講生の気づきの内容が若干異なる様相を呈している．この差異についてはスキルチェックリストの存在が影響しているのではないかと考える．

※参考文献一覧は当日提示する